

マラマッドの女性像 — そのユダヤ的特質を巡って

前 田 讓 治

要約

マラマッド文学全体を視野に入れつつ、父娘、あるいは、夫婦といった、何らかの家族関係にある男性と女性のユダヤ系登場人物を比較すると、洞察力、責任感、誠実さ、現実に対する適応力といった諸点で、女性が男性に対して優位を占めていることが判明する。他方、非ユダヤ系登場人物に目を向けると、男性と女性の登場人物の関係が正反対の形態で描かれている。ここで、二十世紀初頭の在米のユダヤ系移民一世にまつわる現実を目を向けると、家族に対する責任感の強さ、現実に対する適応力の点で、妻が夫を上回る状況が見られた。マラマッドの家庭内にも、そのようなユダヤ系特有の現実の縮図が存在していた。以上の作品構成と現実との照応関係から、家族関係にあるユダヤ系登場人物の男女間にマラマッドが展開した弁別的描写は、在米ユダヤ系移民としての彼の現実感覚に根ざしたものであると結論付けた。

キーワード

The Natural、*The Assistant*、*The Fixer*、*Dubin's Lives*、*The Magic Barrel*、家族、移民

I

Bernard Malamud の長編小説に女性主人公が登場することは皆無で、主人公は全員が男性である。それにもかかわらず、マラマッド文学の先行研究においては、作中の女性像を分析したものが散見する。例えば、Edwin Eigner は、マラマッド文学全体を視野に入れつつ、女性の登場人物が男性主人公に対して有する意味合いの一貫性を論じている (85-107)。Chiara Briganti は、マラマッドが描いた女性が、“never rise above the sexual roles which strictly determine their function in the narrative” (175) という特徴を持ち、“unidimensional characters” (185) であることを指摘している。しかしながら、二つの論

考共に、ユダヤ系の女性登場人物と男性登場人物との間に、作品中で、どのような属性の差異が設けられているかを分析した箇所は極めて少ない。さらには、マラマッドの描き出す女性像と、彼の民族性との関連性を探求した先行研究は見当たらない。そこで、本稿においては、マラマッド作品に比較的多く登場する父娘関係に注目し、父親と娘とが描かれる際に、各々、何らかの一貫性の下に描かれていないかを、マラマッド文学全体を視野に入れることにより明確化したい。次に、夫婦相当の関係にある、ユダヤ系男女、各々の間に、どのような属性の差異が設けられているかを確認したい。以上の作業を通して、マラマッドの描く女性像の特質の一端を明らかにしたい。さらには、マラマッドが提示する女性像の特質が何故に生じてきたのかを、作者の民族的背景を視野に入れることにより明確化したい。最終的には、マラマッドが描く女性像を媒介として、作品世界と作者の民族的背景との関連性を明示したい。

II

The Natural に登場する Iris Lemon は、ユダヤ系とは明示されていないが、ユダヤ的な価値観が幾重にも描きこまれており、ユダヤ系の色彩が極めて強い(前田 222-24)。そのアイリスは彼女の娘に関して、“[S]oon her loveliness and gaiety and all the tender feelings I had in my heart for her made up for a lot I had suffered” (197). と述べている。このように、娘は、アイリスを苦悩から救済する存在として描かれている。対照的に、その娘の父親(ユダヤ系と非ユダヤ系、どちらであるかは不明)に関しては、“She had all she could do to tear herself away from him, and rushed through the branches, scratching her face and arms in the bargain” (141). と描かれている。娘の父親は、アイリスを傷つけ、彼女に脅威を与える存在として描かれている。娘の父親に相当する男性がアイリスに関係を強要する際の様子には、“pounced like a tiger” (141) と描かれ、粗暴性が基調となっている。その男性はアイリスを妊娠させるが、生まれた娘の養育には全く関与しない。他方、Roy Hobbs も、先の男性と同様にアイリスを妊娠させ、アイリスの子供(雌雄不明)の父親となっている。しかしながら、ロイは彼が放ったファウルボールによってアイリスに重傷を負わせながら、試合終了後には、身重で重傷のアイリスに注意を向けることが皆無である。つまり、アイリスを精神的に救済する娘と、妻と子供に対する無責任な姿勢を基調とする父親という露骨な描き分けが、ユダヤ系の色彩が濃厚なアイリスを介在した父娘の間には存在している。

The Assistant に目を向けると、Morris Bober は、娘 Helen が健在でありながら、数十年前に亡くした息子 Ephraim のことを繰り返し回顧している(7, 225-26)。その結果、モリスの心理においては、死去した息子が、健在のヘレンと比して勝るとも劣らぬ存在感を有している。父親がそのような感性を有している事実を、ヘレンも以下の引用のとおり、息子の死

後の父親の行動パターンの変化を通して察知している。

When she and her brother were kids, at least on Jewish holidays Morris would close the store and venture forth to Second Avenue to see a Yiddish play, or take the family visiting; but after Ephraim died he rarely went beyond the corner. Thinking about his life always left her with a sense of waste of her own. (20)

他の箇所でも、ヘレンが父親のことを考える際の彼女の心理は、“She pictured her father asleep after his long day, dreaming of Ephraim” (45-46). と描かれている。つまり、モリスは、亡き息子への愛情の強さの無意識的な発露を通して、父にとってのヘレンの存在感の薄さを彼女に痛感させ、彼女を悲しませている。このように、モリスの感情抑制の甘さが継続的に娘を傷つける様子が描かれている。モリスのヘレンに対する愛情の篤さには疑いの余地がなく、亡き息子に対するモリスの思慕の強さゆえにヘレンが傷ついている事実にもモリスが気付いていたならば、彼は心痛を覚えたはずである。しかし、先の引用に見られるような、モリスの心理状態に起因するヘレンの空虚感に、モリスはついに気付かず、ヘレンが傷つくに任せている。

以上のようなモリスに対するヘレンの評価は、“[B]eing naturally honest, he didn't believe that others come by their dishonesty naturally. . . . [H]e didn't have the imagination to know what was missing” (230). と描かれている。このように、ヘレンは、モリスの現実に対する洞察力の欠如を批判している。他の箇所でも、彼女は、“At the end you were sixty and had less than at thirty. It was, she thought, surely a talent” (17). と考え、現実へのモリスの対応能力の欠如に言及している。実際に、生計を立てるためには、モリスは娘の収入からの補助が入用で、彼は最後に至るまで自活を実現できない。しかしながら、ヘレンが終始一貫して発揮し続ける倫理性や善意の強固さは、モリスの人格を正に継承したものである。つまり、モリスは、倫理性、善意といった人格面でヘレンに絶大な影響を及ぼしながら、優しさと思いやりの強さ以外の彼の属性は、娘の軽蔑の対象となっている。倫理性の崇高さとは裏腹に、娘の尊敬の対象とはなりえない父親の姿が、『アシスタント』には描かれている。

別視点から、モリスとヘレンの父娘関係を眺めてみたい。ヘレンの道徳性、倫理性の強靱さと接触することによって、“The matter was how he now felt, and he now felt bad he had done it. And when Helen was around he felt worse” (89). という形で、モリスの店

の店員 Frank Alpine は強く心を動かされ感化される。さらには、ヘレンが語った、倫理に関する理念は、フランクの思考を以下の引用のとおり継続的に強く支配する。

Often since the time Helen had been in his room he had recalled her remark that he must discipline himself and wondered why he had been so moved by the word, why it should now bang around in his head like a stick against a drum. With the idea of self-control came the feeling of the beauty of it — the beauty of a person being able to do things the way he wanted to, to do good if he wanted; and this feeling was followed by regret — of the slow dribbling away, starting long ago, of his character, without him lifting a finger to stop it. (157)

ヘレンの人格と継続的に接触した結果、フランクは最終的に内面的に完全に生まれ変わる (242)。一方、先ほど確認したとおり、ヘレンの強固な倫理観は、モリスの人格を継承した結果であり、あくまで、モリスの影響下において生成されている。しかしながら、モリスと頻繁に接する機会を持ちながら、ヘレンの倫理性の母体をなしているモリスの善性によっては、最後に至るまでフランクは完全には感化されない。例えば、モリスは彼の倫理性に関する理念をフランクに直接語り、フランクはモリスの発言に感銘を受けたようにも見える (124-25)。しかしながら、その直後に続くのは、フランクによる店の売上金の着服をモリスが確信する場面である (126-27)。この二場面の推移は、モリスのフランクに対する感化力の脆弱さを示唆する。一方、フランクが確固たる倫理性を完全に体得するのは、あくまでもモリスの死後であり、モリスとの交流が途絶してから長時間が経過した後である。このように、ヘレン以外の他者を感化することが困難なモリスの倫理性の感化力の弱さと、フランクの内面を完全に別存在に変化させるヘレンの倫理性の感化力の強さととの対照性が、鮮明に描かれている。他者に対する感化力の点で、娘が父を圧倒する様子が描かれている。

加えて、ヘレンはフランクの内面性に関して、“[A]mong his other disadvantages there was something about him, evasive hidden” (121). と評し、フランクの挙動の観察をとおして、彼の内面性を正確に洞察している。ヘレンは、フランクに関して、“strangely watchful, looking back from time to time as though they were being followed” (131) とも観察しており、Ward Minogue に対するフランクの意識の方向性を、彼の微細な挙動から正確に読み取っている。フランクとの接触時間が少ないモリスの妻の Ida ですら、彼に関して、“He was like a man with two minds. With one he was here, with the other someplace

else” (122). と認識し、ヘレンほど正確ではないにせよ、彼の本質をかなりの確に見抜いている。

その一方で、フランクは長時間モリスの傍にあり、その際には、モリスに対する強盗に加担したことを頻繁に悔悟し、良心の呵責に苛まれている。その最中であってフランクは、モリスに対して、“‘With me one wrong thing leads to another and it ends in a trap’” (36). と述べ、罪の間接的な告白さえ行っている。それにもかかわらず、フランクの煩悶の原因となっている、彼が二人組の覆面強盗の片割れである事実にモリスは容易には気付かない。このように、モリスの現実把握能力の不十分さが描かれている。共犯としてモリスに対して強盗を働いた際に、覆面のフランクは相棒から殴打されたモリスに水を飲ませ、自らも水を飲んでいる (26)。そのフランクは、後日、刑事が強盗の容疑者を店に連行して来た際に、モリスに対して、“‘You want some water, Morris?’” (142) と尋ねている。その上、フランクは、この場面でも水を口にしている。これら二つの符合を目の当たりにしながらも、モリスは、フランクが強盗の片割れであることに容易に気付かない。ヘレンの心情をモリスが推し量れない点はすでに確認した。つまり、他者の心理に関する洞察力の点でも、モリスはヘレンに圧倒されている。アイダですら、モリス以上の対人の観察能力を発揮している。フランクが大々的に店の売上金を着服しても、その事実をモリスは長らく看過する。ヘレンとフランクとの関係の深化に関しても、モリスは皆目見抜けない。この点に関しても、アイダの方が事態を正確に把握している。加えて、モリスは、自分の店の売り上げが向上した真の理由も長らく把握できない (154, 171)。モリスが、口伝えに聞いた情報を整理できない点が、彼の不十分な現実把握の原因である。

モリスの別の側面に目を向けると、彼の店の経済状況を悪化させるのが必至の、新設中の食料品店の内部の様子をモリスは何度も目視し (12)、彼の商売に壊滅的打撃を与えるのが確実な、ピラに記載された特売品の内容を読み上げ、さらには、ピラを寝室に持ち込みさえしている (172)。モリスは、彼の心痛を増幅させる、自虐的行動を意識的に反復している。このように、モリスの行動が創造性を欠く様が、再三描かれている。このようなモリスとは対照的に、ヘレンは、“She promised herself she would save every cent possible and register next fall for a full program at NYU, night” (15). と決断し、自分の不遇を痛感しつつも、それを積極的に打破しようとして、その方策を案出している。父親以上に、創造的な対応を現実に対して行う娘の姿が描かれている。

さらには、モリスが行った雪掻きに関する判断の点でも、アイダとヘレンが、妥当性の点で、モリスを完全に上回る。具体的には、アイダは、上着を着用せずに雪掻きを行ったモリスの不注意に激怒し (223)、ヘレンも、モリスの雪掻きを、“tempt fate” (223) と認識してい

る。他方、モリスは、アイダとヘレンの意向に反して軽装で雪掻きを行った結果、肺炎で死去している。このストーリー展開も、モリスの判断力の悪さと、アイダとヘレンの判断の妥当性の間の対照性を印象付ける。モリス自身、雪掻き終了直後に体調の悪化を実感し、自分の判断の愚かさを認めている (225)。

また、モリスは過去に、食料品店を Charlie Sobeloff と共同経営していた。その際には、アイダの警告を無視して、モリスは帳簿の管理をソベロフに一任する (204-5)。この判断が災いして、モリスは多額を出資した店をチャーリーに詐取されてしまう。このような過去があるにもかかわらず、ソベロフの所に、モリスは職の提供を懇願しに赴く。その際にモリスは、ソベロフのスーパーで、数時間のレジ打ちを行う。しかし、仕事の終了後に、ソベロフは売上金の不足をモリスに指摘する。この指摘の真偽は不明であるが、それに促されて、モリスはチャーリーに、不足分の一ドルを支払っている。つまり、以前にモリスの資産を詐取した前歴のあるソベロフに職の提供を懇願した結果、数時間の労働を行い、かつ、一ドルを徴収されるという、不条理極まりない結果をモリスは招いている。以上のようなモリスの描写を通して、現実に対応する際の判断力の点で、ヘレンがモリスを圧倒する様子が描かれている。モリスは、“the ethical center of the novel” (Hershinow 34) と位置付けられ、ヘレンの人格がモリスの影響下で形成されるなど、彼の作中の存在感は極めて大きい。それにもかかわらず、倫理性とは無関係の、現実への対処能力に関しては、あらゆる面で、娘と比較して、モリスが大きく劣っている様子が反復的に描かれている。

Dubin's Lives に議論を移すと、William Dubin と Fanny Bick との愛人関係と、彼の娘 Maud と黒人教師との愛人関係は、共に、老境の男性と若い女性の関係という点で、相似型をなしている。モードは、愛人に関して、“I valued myself better when I was with him” (340)、 “When we talked I could see his love” (340)、あるいは、“I was happy with him” (341)。と述べている。モードは、このような純愛に支えられて、父親以上に高齢の男性との結婚を決意し、彼との間に懐妊した子供を育てる意欲を示す。作品末尾の暗示的な描写からは、モードが高齢の愛人と実際に結婚し、出産したことが推測される。

他方、ドゥービンがファニーを、“a vital sexual creature” (328) と位置づけている。また、ドゥービンのファニーへの姿勢の描写には、“Afterward he savaged himself for her hold on him” (285)、 “desire” (329)、 “the evil effects of his nature” (331)、 “wiles” (333)、 “his desire for her” (338)、といった表現が付随している。以上の事実から、ドゥービンのファニーに対する執着心を支えているのは、肉欲である点に分る。また、ドゥービンが、ファニーと最初の関係を持つ直前に、“This evens it, Dubin thought, for the cruel winter” (208)。と思念している事実からも、彼は、ファニーとの関係を自己中心的な視点から眺めて

いる。だからこそ、ファニーは、ドゥービンにとっての彼女の意義を “a substitute for your lost youth” (267-68) と認識して失望するのだ。ファニーから拒絶された際にも、ドゥービンは未練に身をやつし、嫉妬ゆえに醜態を曝している (366)。ドゥービンは初対面の時から一貫して、肉欲に駆られて、時として自制心を喪失しつつ、ファニーとの関係の維持を目指している。また、ドゥービンは経済的に切迫した状態にありながらも、ファニーとの交遊に金銭を蕩尽している (332)。農場経営を始めたファニーが金銭面で逼迫していることを知ったドゥービンは、自分の収入の多さを彼女に対して誇示してもいる (357)。金品の贈与によって、ファニーとの関係の延命を図っている節も、ドゥービンにはある。このように、相似形をなす愛人関係において、娘の愛人への愛情の純粹さと、父親の愛人への視線の低劣さとの間に、完全な対照性が設けられている。

過去に、ファニーと共にローマに旅行に出かけたドゥービンは、旅行先で、モードが年長の男性に同行しているのを目撃した感覚に襲われる。その感覚を引き摺り続けるドゥービンは、帰郷したモードに対して、愛人の有無を間接的に問う (172)。このドゥービンの態度が原因で、帰郷していたモードはそそくさと大学に戻ってしまう。作中で二度目にモードが帰郷した際に、ドゥービンはモードの愛人に対する愛情の深さを理解出来ず、懐妊した娘に墮胎を強く勧める。ドゥービンは、ファニーに対する高齢の愛人としての立場の継続を熱望しながら、娘が同様に高齢の愛人を持つことには反対姿勢を示している。このあり方は、ドゥービンの自己中心的性向を浮き立たせる。また、出産への父の反対姿勢は、モードを、“. . . I'm miserable here” (344). という心理状態に追い込む。このように、重大な選択を迫られた娘の力に全くなれず、娘をむしろ圧迫する父親の不手際が描かれている。さらに、モードは姦通関係にある愛人に関する詳細をドゥービンに伝える一方で、ドゥービンはモードに愛人の存在を見抜かれながらも、その詳細をモードに一切伝えない。父親の人格面での瑕疵が、娘との関係の中で一貫して強調される構成を、『ドゥービン氏の人生』には指摘できる。

ユダヤ系のファニーと父親の関係に関しても、僅かに紙数が割かれている。例えば、ファニーの父親に関して彼女は、“He's self-centered and doesn't have much respect for me or my mother . . .” (62). と述べている。あるいは、“She told him [Dubin] that her father, recovered from his present illness, had gone with a chick to the South of France” (327). というファニーの父親の描写も登場する。肯定的に評価されうる人格的側面が皆無で、娘に人格面ではるかに劣る父親の姿が、ファニーの父娘関係を通して描き出されている。

III

今度は、短編小説に登場するユダヤ系の父娘の関係に目を向けたい。“The First Seven Years”において、Feld の娘 Miriam は、高収入を得るのが将来確実ながらも、金銭に対してのみ興味を示す Max の低俗な価値観を見抜く (11)。フェルドが経営する靴屋に、マックスが靴の修理の依頼にやってきた際に、彼は、フェルドと共に靴の修理代の多寡に異常に拘泥している (6)。小額の金銭への極端な拘泥の描写を通して、マックスの金銭への執着心の強さが暗示されている。フェルドは娘の意向を全く無視して、娘の将来の裕福さのみを念頭に置いて、そのような低俗な価値観を持つマックスと娘の縁談を進めようと試みる。娘は、そのような父親の態度を拒絶する。他方、ミリアムは、父親が見抜くことが出来なかった、靴の修理職人 Sobel の内面的な崇高さを見抜く。同様に、ミリアムは、彼女に対するソベルの愛の純粹さも正確に見抜いている。その結果、ミリアムはソベルを愛するに至る。この作品においては、男性の内面性に対する洞察力や評価の妥当性の点で、娘が父に圧倒的な優位を占める様子が描かれている。

“The Magic Barrel”においては、両親以外の存在への愛を持つことが出来ず (213)、神すらも愛せなかった “loveless” (205) と位置付けられる Leo Finkle が登場する。リオは、彼が結婚するに当たっての前提条件となる、“premarital love” (207) の必要性を認識するに至る。リオが必要としている、そのような愛を喚起するのが、結婚斡旋人の Pinye Salzman の娘 Stella の写真なのである。リオはステラの写真を見た直後に彼女との面会を渴望するが、その際のリオの心境は、“She might, perhaps, love him” (209)、あるいは、“[L]ove has at last come to my heart” (213) と描写されている。ステラが不身持という大問題を有する点を、父親はリオに対して警告するが、リオの愛は揺らがない。つまり、急激に芽えた強靱な愛に支えられたリオが目指すステラとの出会いを阻もうとするのが、ステラの父親ザルツマンなのである。他方、結婚仲介人のザルツマンがリオに紹介する複数の女性は、年齢、健康状態等の条件でリオに不満を引き起こすのみで、彼に失望感、憤怒の念を掻き立てる以外の結果をもたらさない。『魔法の樽』においては、リオに愛を喚起する力の点で、娘が父親を圧倒する構図が導入されている。

“Suppose a Wedding” に議論を移すと、父 Feuer は、青年 Leon が娘 Adele の婚約者として不適切であると決め込み、アデルはレオンを愛していないと勝手に曲解している (181)。そのため、父親は、娘を訪ねてきた、娘が愛する婚約者に面と向って、娘の婚約者として不適格である旨を強調するなど (179)、幼稚な対応に終始する。父親のそのような対応は、娘アデルの意向を完全に無視しており (180)、『最初の七年間』のフェルドの姿勢を想起させる。その一方で、アデルは、婚約者に対する愛情を確信しながらも、婚約者が突然訪問する前に

軽い気持ちから結んだ、他の男性との先約を優先することを考える。父親は、婚約者として適当であると思込んでいる、先約を結んだ男性と交際することを娘に強く勧め、娘の意向に配慮するそぶりが無い(187)。このように、父親の幼児性は一貫している。母親は反対に、娘が結んだ知人男性との先約を破棄するよう、娘に迫る。訪問して即座にはアデルとの逢瀬を楽しめないことを知った婚約者のレオンも、アデルとの逢瀬を無理に即時に実現しようとして、次第に我を失ってくる。アデルのみが、知人との先約を守るという常識的な判断を冷静に下している。やはり、判断の妥当性の点でアデルは父親を圧倒しており、マラマッドの描く父娘関係の基調に揺らぎはない。

“Take Pity”において、愛他性に満ちた Rosen は、寡婦の Eva Kalish に求婚する。ローゼンは、エヴァの娘二人に対しても溢れんばかりの無私の愛情を表出している(93)。ローゼンは、究極的な愛を内包しており、二人の娘の理想的な父親となる可能性が極めて高い。しかしながら、ローゼンの切々たる想いと共になされた求婚の努力にもかかわらず、詳述されているエヴァの頑強な拒絶によって、最後に至るまで彼は娘の継父にはなれない。本稿で確認してきた、父娘関係の描写に込められた一貫性に対して例外となる父娘関係をローゼンは形成する可能性が極めて高いが、エヴァの頑強な拒絶反応ゆえに、その一貫性が乱されることはない。以上のとおり、マラマッドが、長編、短編を問わず、人間性、あるいは何らかの能力の面での一貫した優劣関係をユダヤ系の父娘関係の描写に付与しようとする明確な意思を有していたことには、疑いの余地がなくなった。

注目すべきは、マラマッド文学においては、ユダヤ系の父と息子の関係の詳述が希少な点である。そもそも、以上に考察してきた、『ナチュラル』、「結婚式を想定して」、「魔法の樽」、「最初の七年間」には、父娘関係のみが登場する。息子が存在する長編小説である『アシスタント』の場合、息子は死去しており、『ドゥービン氏の生活』において、息子は海外滞在のため不在である。両作品に息子の描写は登場するが、父親との人間性の比較が出来るほどには具体的な描写がなされていない。父と息子の関係が中核をなす作品としては、“The Silver Crown”と、“My Son the Murderer”と、“The Letter”の三短編がある。これらの短編に描かれている父子関係にあっては、むしろ、息子が咎を負う側に置かれている(Abramson 135)。父子関係が、終始、描写の俎上に載せられている、“Idiots First”においては、父親が“human values of love”によって、息子にまつわる“providential fate”を改善している(Abramson 134)。以上の事実からは、親子の間ではなく、あくまで、女性と男性との間に、マラマッドは優劣関係を設定しようとして試みていると推測できる。

IV

次に視点を変えて、マラマッド文学における非ユダヤ系父娘の親子関係描写に目を移すと、描写基調は一変する。例えば、*The Fixer* の Kogin は、彼の娘に関して、“I had trouble enough with my daughter, who got herself pregnant by a man of my age, a goddamn drunk . . .” (242). と述べている。生活の規律の点で明らかに、娘が父親に劣っている状況が描かれている。他方、コギンは、監視の対象にしか過ぎない主人公 Yakov Bok の苦悩に同情を示す慈悲深い人物として描かれている。コギンは、ヤーコフの命を救うために、最終的には自らの命さえ犠牲にしており、非ユダヤ系登場人物の中で、B.A. Bibikov と並んで最も強く読者の共感を刺激する人物として登場している。つまりは、ユダヤ系登場人物の父娘関係を正に逆転したものが、非ユダヤ系登場人物に関して展開している。コギンの娘は、同様に不身持ちが暗示されながらも、愛に関する覚醒をリオに喚起するザルツマンの娘とは、全く異なった基調で描かれている。コギンと彼の娘との関係は、“In Retirement”の父娘関係と相似関係を形成している。この短編にも、複数男性との奔放な関係に耽溺する娘の将来を純粋な親心から心配する、堅実な思考の父親が登場している (113)。父親の常識的な視点と娘の無軌道な生活ぶりが対照をなしている。“The Bill”に目を移すと、食料品店を購入した直後の夫婦は、“the new people across the street who had bought out the Jew” (146) と描かれている。売り手のみに関して特にユダヤ性を明示する記述は、購入者である夫婦が非ユダヤ系である事実を間接的に伝える。その非ユダヤ系夫婦の娘は、結婚相手の利己的な男性の影響のために性格が劣悪化し (145)、また、“stone-faced” (153) と描かれており、人格の低劣さが強調されている。娘の気質は、他人の善意を信頼し、現金の持ち合わせのない客の便宜を図って掛売りを続ける両親の心優しさと対照をなす。このように、非ユダヤ系登場人物の父娘関係に目を向けると、ユダヤ系の場合とは全く異なった基調で描き出されており、ユダヤ系の父娘関係のみを、特定の一貫性の下に描き出すことをマラマッドが明確に企図していた事実が判明した。

V

以下においては、夫婦相当の関係にあるユダヤ系男女の描き分けに注目したい。まず、マラマッド文学に登場する、ユダヤ系登場人物に対してなされる、子ども、あるいは、家族の放棄は、全てが男性によってなされている点に注意したい。例えば、『修理屋』において、Raisl Bok は、結婚後に子供を儲けることが出来ないことが判明した後、夫ヤーコフから会話を完全に拒絶される。夫は家庭内に留まってはいるが、夫婦関係はヤーコフの意向で完全に途絶する。家庭内においてはであるが、ヤーコフはレイスルを実質的に放棄している。そ

の後、レイスルは駆け落ちを行い、ユダヤ系男性との間に私生児を儲けるが、その男性は、レイスルと子供を放棄する。このように、実質的にレイスルは二度、夫に相当するユダヤ系男性から放棄されている。男性の無責任さの被害者となるユダヤ系女性の姿が描かれている。

『ナチュラル』においても男性が、アイリスとの間に儲けた私生児と出産後のアイリスとを放棄している。「結婚式を想定して」には、夫が姦通ゆえに、妻の下を三回立ち去った過去が登場する(187)。その姦通によって生じた夫の不在中には、妻が終日働くことを強いられたため、妻が、娘アデルの養育を愛人の友人に委ねた過去すらある(187)。家族に対する父親の無責任さが、この短編劇でも際立っている。“The Mourners” においても、主人公 Kessler に関して、“At one time he'd had a family, but unable to stand his wife or children, always in his way, he had after some years walked out of them. He never saw them thereafter, because he never sought them . . .” (17). という記述がある。家族放棄こそが、僅かのみ語られる主人公のプロフィールの中の大きな要素となっている。

“The German Refugee” に登場するユダヤ系ドイツ人の Oskar Gassner は、ナチスが席卷するドイツに留まることに多大な恐怖を感じ、妻をドイツに残して、単身アメリカに逃亡する。オスカーは、非ユダヤ系の妻にアメリカに同行するよう渡米前に促すが、オスカーが同行を願ってはいないことを気取った妻は拒否する(208)。非ユダヤ系の妻の母親は反ユダヤ傾向が強く(197)、この事実は、オスカーの単身渡米の決断を正当化するものの、オスカーも実質的に妻を放棄している。渡米後、オスカーは英語での講演を生業とする。しかしながら、講演の原稿を書く素養をオスカーは有しながらも、母国に対する呪詛の念や、母国語以外の英語で講演を行うことへの恐怖に翻弄され、原稿執筆は遅々として進まない(206)。そのため彼は、異国での自活という私的問題の解決のみに汲々とし、妻に想いを馳せる余裕が持てない。オスカーは、ドイツ在住の妻が、彼との婚姻関係が原因で殺害されたことを知った直後に、自殺する。オスカーのこの決断からは、妻に対する彼の思慕の念の強さが推し量られる。しかしながら、そのような彼の妻への思いは、自活に拘泥する彼の様子の詳述のために、終末に至るまで読者には伝わらず、作中では、妻への彼の無関心が基調となっている。以上に眺めた家族放棄は、ユダヤ系男性によってなされるか、あるいは、ユダヤ系女性に対してなされるかしており、ユダヤ系男性の家族への責任感の脆弱さを強調する傾向がマラマッド文学には見られるといえる。マラマッド文学において女性が子供の養育を放棄した例を探せば、それは、*A New Life* における Pauline Gilley となり(358)、非ユダヤ系女性なのである。

女性の登場人物が現実と毅然として対峙する傾向が顕著な点も、マラマッド文学の全体的特徴である。対照的に男性は、自分が直面を強いられた現実から目を背け、そこから逃避する傾向が強い。例えば、『ナチュラル』におけるアイリスや、『修理屋』のレイスルは、男性

に放棄されたがゆえに生じた苦境に、毅然として直面する。その一方で、レイスルが結婚生活を通して妊娠できないことを知ったヤーコフは、レイスルとの対話を完全に拒否し、読書への没頭に逃避する。ヤーコフは、自己にとって不都合な現実との正対を拒否している。他方、レイスルは、夫が書物に没入し自分に対して無関心を貫く事実を直視し、その現実に対処すべく、夫から離別する。対照的に、ヤーコフは、レイスルとの離別後に、彼がユダヤ系であるという現実との直面を回避するため、自分を非ユダヤ系と偽る。現実に対応する際のスタンスに関して、ユダヤ系の男女間で露骨な差異が設けられていることは明白である。

“The Jewbird”に目を向けると、夫の Harry Cohen は、家に居ついたユダヤ鳥 Schwartz を、追い出そうとする。ユダヤ人が一般的に好むと考えられている食物を食べるシュワーツの、食に端を発する体臭をコーエンは特に唾棄するからだ。また、コーエンは鳥がユダヤのアイデンティティを持っていること自体に強い不快感を示している(110)。これらの点からは、鳥の存在が、コーエンに、彼がユダヤ人である事実を想起させるがゆえに、ユダヤ鳥へのコーエンの粗暴性が生じていると推測できる。この推測は、シュワーツの指導によって成績が向上した息子を、コーエンが、アイビーリーグの大学に進学させようとしている事実からも裏付けられる。これらの大学での作品発表当時のユダヤ人差別の激しさは周知の事実であり、アイビーリーグの大学へのユダヤ系の息子の入学を想定するコーエンの姿勢は、家族がユダヤ系である事実からの逃避と解釈できるからだ(Solotaloff 79)。あるいは、シュワーツが行うユダヤの祈りを聞いた時に、それに唱和する妻 Edieとは対照的に、コーエンが祈りを完全に無視している点も、先の推測の論拠となる。Edward Abramson もコーエンに、“desire to escape being Jewish”(134)が内在すると指摘している。他方、妻は、コーエンの対応に根ざすシュワーツの心痛に同情している(109)。エディは、シュワーツが息子の学業成績とバイオリンの技能の向上に貢献していることも認める。妻は、自分がユダヤ人である事実を想起させる鳥に対して、夫とは異なって、拒絶反応を皆目示さない。『ユダヤ鳥』においても、己の民族的アイデンティティという現実と直面する度合の差異が、夫婦間に顕著に認められる。

以上のとおり考察すると、マラマッド文学においては、夫婦に類する関係にあるユダヤ系の男女を比較した場合、責任感、現実への適応力などの諸点で、女性の男性に対する優位性が描かれる傾向が強いことが判明した。この傾向は、父娘関係の描写の中に確認された傾向との類似性が極めて強い。しかし、すでに確認したとおり、非ユダヤ系に関しては、父娘関係が正反対の構図で描かれていた。それでは、マラマッドは、ユダヤ系登場人物の男女間へののみ、なにゆえに、一定のパターンでの優劣関係を徹底して設けたのだろうか。その理由を、在米ユダヤ系移民固有の現実の中に探してみたい。

VI

20世紀初期にアメリカに移民してきたユダヤ移民一世の夫には、“[A]t some point at least one-quarter of the Jewish fathers in America deserted their families . . .” (Hertzberg 187). というあり方が見られた。Irving Howe も、1900年代と1910年代初期における、“the persistent desertion of families by immigrant husbands” (179) の存在を指摘している。同様に、Gerald Sorin も、“[I]n the early years of the twentieth century desertion by Jewish husbands became disturbingly evident on the Lower East Side [of Manhattan]” (82). という観察を行っている。ユダヤ系の家族において、家族放棄を行ったのは、“almost always male” (Freidman 581) であったともいう。以上の状況の結果、“Many Jewish mothers, in fact, raised their children alone” (Hertzberg 187). という状況が生じた。これらの家族放棄は、当然のことながら、ユダヤ系移民の間に苦痛や (Hertzberg 187)、憎悪の念 (Howe 180) を引き起こすことになった。

以上のとおり、在米ユダヤ系移民一世の父・夫は、家族への無責任さを特徴とし、在米ユダヤ人の多くが、この事実に悲憤を感じていた。ユダヤ系移民二世のマラマッドが誕生した1914年前後の、アメリカのユダヤ系一世の父親に関する歴史的事実は、ユダヤ系一世の父親の無責任さをマラマッドに印象付けるものであった。そうであれば、ユダヤ系女性が夫に相当する男性から無責任にも放棄されるあり方が、マラマッド文学に頻出する点は、作者の若年時の現実認識の産物と位置付けることが可能である。在米のユダヤ系移民一世男性の歴史的汚点に対するマラマッドの意識の鋭敏さを、男女に関わる弁別的描写の背後に明確に指摘できる。

再び、在米ユダヤ人の歴史に目を向けると、アメリカにおけるユダヤ系一世の母親に関しては、“[especially] quick to grasp the new opportunities for women” (Feingold 38)、あるいは、“[I]t was often women who first attained language fluency and social competence” (Feingold 43). という指摘がなされている。このような、新天地に柔軟に順応する母親のあり方は、父親に関する、“[a] slower, traditional-minded husband” (Feingold 38) という、新天地の現実に即応できなかったあり方と好対照をなす。これらの父母に関する素描の適切さは、以下の類似した観察によって立証される。

The mother, especially in the early years of a family's life in America, appears to have coped best with the strange new world of the tumultuous American city and, through her scrappiness and strength, frequently was able to hold things together. (Sorin 93).

その一方で、移民先のアメリカにおいて、“alienated”という状態に置かれたユダヤ系一世の父親は、“steeped in Old World ways”、あるいは、“unable to speak [English]”という立場に置かれ (Feingold 38)、移民一世の父親の多くは家族を養えなかった (Hertzberg 185)。以上のとおり、アメリカの移民一世のユダヤ系の母親は、新天地の現実に対処できない夫を尻目に、アメリカの現実に巧みに適合していた。マラマッドの両親 (移民一世世代) に目を向けても、父親が“capacity and imagination to live”を欠いている一方で、母親はそれを有していたという (Davis 14)。このように、マラマッドの両親の間に認められた現実への対応能力の落差は、在米ユダヤ系移民一世に関する現実の縮図となっていた。そうであれば、マラマッド文学において、夫婦間に見られた、現実への対応のあり方に関する対照性も、在米ユダヤ系移民一世にまつわる歴史的現実を作中で再現せんとする作者の意識が働いた結果と解釈できる。

在米ユダヤ系移民一世の母親が、子供に対する責任感と、現実への適応力の点で父親に勝っていた結果、“[an apparent] shift of children’s loyalties from father to mother”、あるいは、“destruction of the authority of the father within the immigrant family” (Hertzberg 185-86)、といった現象が、ユダヤ系家族に生じた。この指摘と類似したものとして、父親が二世世代の子供に対して、“parental authority”を喪失したとの観察がある (Feingold 38)。マラマッドの伝記を紐解いても、食料品店の経営を生業とした父親に、マラマッドは、“baseless pessimistic reactions to hopes and plans” (Davis 12)を見出し、父親の食料品店経営が招いたものが「痛切で際限なき空腹」であった点を指摘している (Davis 14)。このように、マラマッドの父親に対する伝記における視点は辛辣である。対照的に、母親に関してマラマッドは、彼を生んだことが母親の肉体に後遺症を残したことを懸念し (Davis 5)、家庭教師の体罰から母が彼を守ってくれたことや (Davis 9)、母親の愛の強さを記憶に残している (Davis 11)。母親の統合失調症にマラマッドは悩まされたにも関わらず (Davis 5)、母親に対する伝記中の彼の視点には敬意が含まれている。伝記から読み取れる、マラマッドが両親各々に下した評価は、まさに在米ユダヤ系二世として典型的な評価であった。

VII

移民に伴う物理的移動の結果、在米ユダヤ系の家庭生活の複数領域において、母親の父親に対する優位性が移民二世に対して印象付けられる状況が招来された。マラマッドの両親に関しても、典型的な在米ユダヤ系移民一世としての現実が様々な形で付随していた。そうであるならば、マラマッド文学に見られた、家族関係にある男女間の、余りにも露骨な種々の

優劣関係の設定の源泉は、マラマッドのユダヤ系移民二世ならではの現実認識に帰さざるをえない。マラマッドが行った男女間の優劣関係の描写の背後には、在米ユダヤ系移民二世としての典型的な感性が息衝いていると考えられる。再度、『アシスタント』に目を向けると、倫理性や利他性の点でモリスはアイダを完全に圧倒し、モリスは読者の共感を強く喚起するタイプの登場人物である。そのようなモリスであるにもかかわらず、現実への対処能力の点ではアイダと比較すると完全に無力であった。このような不可思議な設定がモリスに関して生じてきたのは、在米ユダヤ系移民一世にまつわる現実をマラマッドが作品に反映させようとした結果であると考えたと説明がつく。マラマッド文学に登場する、男女、特に父娘の間に見られる弁別的描写は、在米ユダヤ人の歴史的現実を反映しているのである。一見すると、作者の民族性とは関連性がないと映る、女性に関する描写基調すらもが、実は、作者の民族的背景と密接に関連している。ユダヤ系移民一世世代固有の、男女間に存在した差異に対するマラマッドの鋭敏な意識こそが、マラマッド文学における女性描写の方向性と一貫性を強靱に統括しているのである。

Work Cited

- Abramson, Edward. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993.
- Briganti, Chiara. "Mirrors, Windows and Peeping Toms: Women as the Object of Voyeuristic Scrutiny in Bernard Malamud's *A New Life* and *Dubin's Lives*." *Critical Essays on Bernard Malamud*. Ed. Joel Salzberg. G.K. Hall: Boston, 1987. 174-86.
- Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. New York: Oxford UP, 2007.
- Eigner, Edwin. "The Loathly Ladies." *Bernard Malamud and the Critics*. Eds. Leslie Field and Joyce Field. New York: New York UP, 1970. 85-107.
- Feingold, Henry L. *A Time for Searching: Entering the Mainstream 1920-1945*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1992.
- Freidman, Reena. "'Send Me My Husband Who Is in New York City': Husband Desertion in the American Jewish Immigrant Community 1900-1926." Vol. II of *East European Jews in America, 1880-1920: Immigration and Adaptation*. Ed. Jeffrey Gurock. New York: Routledge, 1998. 577-94.
- Hershino, Sheldon. *Bernard Malamud*. New York: Frederick Ungar, 1980.
- Hertzberg, Arthur. *The Jews in America*. New York: Columbia UP, 1997.
- Howe, Irving. *World of Our Fathers*. 1976. New York: Schocken, 1990.

Malamud, Bernard. *The Assistant*. 1957. New York: Farrar, Straus and Company, 1963.

———. “The Bill.” *The Magic Barrel*. 145-53.

———. *Dubin’s Lives*. New York: Farrar Straus Giroux, 1979.

———. “The First Seven Years.” *The Magic Barrel*. 3-16.

———. *The Fixer*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1966.

———. “The German Refugee.” *Idiots First*. 195-212.

———. *Idiots First*. 1963. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1986.

———. “In Retirement.” *Rembrandt’s Hat*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1973.
109-24.

———. “The Jewbird.” *Idiots First*. 101-13.

———. *The Magic Barrel*. 1958. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1980.

———. “The Magic Barrel.” *The Magic Barrel*. 193-214.

———. “The Mourners.” *The Magic Barrel*. 17-26.

———. *The Natural*. 1952. Harmondsworth: Penguin, 1981.

———. *A New Life*. New York: Farrar, Straus and Cudahy, 1961.

———. “Take Pity.” *The Magic Barrel*. 85-95.

———. “Suppose a Wedding.” *Idiots First*. 171-93.

Sorin, Gerald. *A Time for Building: The Third Migration 1880-1920*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1992.

前田譲治. 「*The Natural* における Malamud の Jewish Consciousness について」. 『九大英文学』 32号. 1989年. 211-30頁.